

ハーヴィ・サックスとエスノメソドロジー・会話分析の半世紀

○埼玉大学 山崎敬一

1 目的

ハーヴィ・サックスが、『会話分析講義』のもとになる講義を UCLA ではじめたのは、今からほぼ半世紀前の1965年である。サックスの考え方は、その後半世紀の間に、エスノメソドロジー・会話分析の研究を行うすべての人にとって発想の源泉となっている。この発表では、『会話分析講義』を中心に、サックスの論文や報告や未発表稿にも言及しながら、サックスの考え方の特色と、今サックスからどんな発想を得ることができるかについて、発表者の考えを述べたい。

2 サックスの考え方の特色

サックスの考え方の特色は、一つの問題に対する関心が、複数の考え方を同時に生み出すという、考え方の等根拠性にある。

サックスの「成員カテゴリー化装置」の考え方と、「会話分析」やその中心的な考え方である会話の連鎖組織の考え方は、自殺予防センターにかかってくる「命の電話」の徹底的な分析からともに生まれた。個々の会話ではなく、会話自体の組織を、たくさんの会話のコレクションから分析する会話分析と、成員カテゴリー化装置の考え方には、大きな違いがあるという見方もこれまでであった。しかし、成員カテゴリー化装置と会話分析の考え方にはむしろ共通性があると思われる。サックスは、関係対が、使われているということの証明を、本人が本当にそうしたカテゴリーを使用しているかを問題にするのではなく、警察や家族が、ある死を自殺としてとらえるかどうかの「探察手続き」として用いていることに求めている。サックスは、成員カテゴリー化装置の考え方においても「カテゴリーの使用についての知識」の社会での流通可能性を問題にしたのである。また会話分析の重要な考え方に、「会話の順番交替システム」と「物語の語り」の分析がある。会話の順番交替システムと、物語の語りの分析も、サックスが同一の問題を考えるなかで等根拠に生まれた。サックスの UC アーバインに移った最初の講義（1968年秋の講義）や1970年の秋の第2講義やサックスの出版されずに残された *Second Stories* と名付けられた草稿 においても、物語の語りの分析のあとで会話の順番交替の話が続いている。すなわち、一つの順番を越えて語るという問題（物語の語りの問題）と、一つの順番の語りや順番の交替の問題は、別々に考察されたのではなく、同じく問題を考えてゆく中で共に展開されたのである。

3 サックスの考え方からどんな発想をえることができるのか

ここではサックスの2つの考え方から、サックスの考え方からいま我々がどんな発想をえることができるのかについて、発表者なりの考えを述べたい。取り上げるのは、成員カテゴリー化装置」として洗練される前に、サックスが初期の講義（1964年の第6講義）のなかで取り上げた、M.I.R.カテゴリー化装置という考え方である。もう一つは、パーデュシンポジウム（R. J. Hill & K. Crittenden, 1968）のなかで、取り上げられた「一人問題、二人問題、n人問題」という考え方である。

文献

Harvey Sacks. 1992, Lectures on Conversation, Volume 1, Volume 2, Basil Blackwell

Richard J. Hill & Kathleen Stones Crittenden eds. 1968, Proceedings of the Purdue Symposium on Ethnomethodology, Purdue University Press